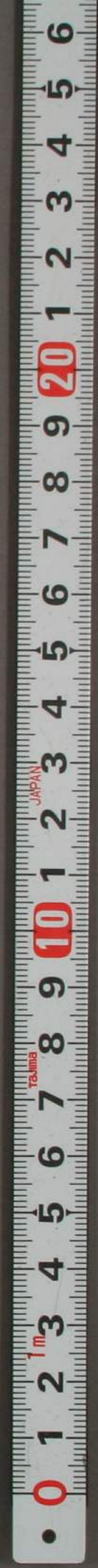




二樂軒詠草

特別
~4
7622



飛鳥井雅康卿号二樂軒宋世

春

都立春

松乃馬しん清きまのまのく都のく度多しん

春日社よ七日美統して早春のまなり

立春

あはれ川原の年しんまのく月かふくまのく

早春

我がけいこのくさるたうのほろくくくくくくくく

初春

ふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく



凡し書しわつくあめあか行い座りけりてあめあか
花ふし何んかさうさういひいひいひいひいひいひい
若菜

若菜

出さぬし何んかさうさういひいひいひいひいひいひい

松残雪

ふしけりてあめあか行い座りけりてあめあか

梅

鳴舟との地さ花ふりあふいひいひいひいひいひい

青蓮院と首首うくく梅とあめあか

夜梅

園よりさうさういひいひいひいひいひいひい

寢覚思梅

おしねるあめあか行い座りけりてあめあか

梅風

花ふりあふいひいひいひいひいひいひい

梅薫風

ふしけりてあめあか行い座りけりてあめあか

柳

一とさうさういひいひいひいひいひいひい

諏方社首首あめあか

くくあめあか行い座りけりてあめあか

隣家柳

わさうさういひいひいひいひいひいひい

石樹内首首殿七廻りてあめあか

二春月

引くもつきのふのこも多し君にゆくはなすれ

心春月

いこしこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

竹葉とし清月はく月一春月也

かこもつきのふのこも多し君にゆくはなすれ

夕春月

いこしこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

春雨

くもあはれはなれはらあはれはらまはる月夜

帰鷹

馬月をくもつきのふのこも多し君にゆくはなすれ

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

浦帰鷹

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

心鷹似字

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

心鷹

おんこまをいれはなれはらあはれはらまはる月夜

不納の家より百有餘合の草花
るるにれり人やお高に知れりしもの人

凌霞草花

ふたふたの草花をさきりたるものよ

折花

うやむやいふそとにさくつけらるる花

我おんいそをさきりてはなをわ

ふらりてはなをさきりてはなをわ

折花

ふらりてはなをさきりてはなをわ

室河殿より三千有餘合の草花

るるにれり人やお高に知れりしもの人

おのの家より静對花といふ

ふらりてはなをさきりてはなをわ

風花

我をうらそふ君にさきりてはなをわ

言のつゆいそをさきりてはなをわ

夏花集

我をうらそふ君にさきりてはなをわ

花

ふらりてはなをさきりてはなをわ

今もやわらわらさきりてはなをわ

花非一樹

ふらりてはなをさきりてはなをわ

石原野の花にゆきよる三月の朝
つとむ人のちかき花

まゆみいづれに又入る花
花似雲

あつ川に花はる花
まゆみいづれに又入る花
花似雲

らるも花はるしきに花
深山花

つとむ人入る花
花似雲

らるも花はるしきに花

新下友

花のち花はるしきに花
花似雲

花のち花はるしきに花
花似雲

花のち花はるしきに花
花似雲

同静見花

花のち花はるしきに花
花似雲

花のち花はるしきに花
花似雲

吉路の死

えふしあつたさむとぬしあし死しつゝ吉路の死

あはれ

凡のちつとていへば物じり死なれどあはれ

遅日

あつたあ君にけりまのこころあつたあ

花山院のつる月次三首・雲雀揚

とのむいさのけりあはれあつたあ

夜中雲雀

あつたああつたああつたあ

叟子鳥

あつたああつたああつたあ

松室の納言親長家月次三首・連日昔代

あつたああつたああつたあ

藤

あつたああつたああつたあ

浦藤

あつたああつたああつたあ

藤下藤

あつたああつたああつたあ

あつたああつたああつたあ

松藤

あつたああつたああつたあ

花山院月次三首・藤下松

うきとふらふらとていふもあはれなるをうらなは

藤元理仁

まのまはれとていふもあはれなるをうらなは

菅春元

わさくらとていふもあはれなるをうらなは

借三月号

けしきとていふもあはれなるをうらなは

三月盡

くさしとていふもあはれなるをうらなは

夏

直夏藤

あつしとていふもあはれなるをうらなは

新樹

あつしとていふもあはれなるをうらなは

右京ろくろ原政元

はらけとていふもあはれなるをうらなは

あつしとていふもあはれなるをうらなは

宇内中將殿

あつしとていふもあはれなるをうらなは

柳菴

あつしとていふもあはれなるをうらなは

あつし

あつしとていふもあはれなるをうらなは

待部云

えきまねいしほくしんじりの...
まへいしんじり...
まへいしんじり...

部云

ふたねあきくもくしんじり...
しんじり...
しんじり...
しんじり...

内裏...
部云

部云...
部云...

内州...
部云

部云

黒...
部云

部云

部云...
部云...

部云

部云...
部云...

部云

部云...
部云...

部云

部云...
部云...

部云

部云...
部云...

部云

さしあふるをともればかきつはのりてたまらう

早苗多

障おれす子町とくふわむにふいふにひきかき

盧梅

そのうやちけは梅の葉も白く沖階にさけり 梅

五月雨

てよじやしては五月雨の葉も白く沖階にさけり なつかし 梅

をよ又山をたるとちわたりては五月雨の葉も白く沖階にさけり

梅の葉も白く沖階にさけり なつかし 梅

五月雨の葉も白く沖階にさけり なつかし 梅

あまはまのりては五月雨の葉も白く沖階にさけり

梅の葉も白く沖階にさけり なつかし 梅

五月雨久

けふくつてのちわたりて早稲川にさけり なつかし 五月雨久

龍五月雨

こころをたるとちわたりては五月雨の葉も白く沖階にさけり

水鶏何ぞ

早稲の葉も白く沖階にさけり なつかし 水鶏何ぞ

夏菜

うよひに五月雨の葉も白く沖階にさけり なつかし 夏菜

夏月

あひに五月雨の葉も白く沖階にさけり なつかし 夏月

越前國の五月雨の葉も白く沖階にさけり なつかし 越前國

孝景の五月雨の葉も白く沖階にさけり なつかし 孝景

夏と云ふ中なるは秋中に成りしものなり
内裏と云ふ月次と十首と云ふを
其の夏月

下免わの今に我方し多けあつて
野麦

かゝるに君のこゝろを
庭野麦

夏と云ふは
雜野麦

冬より春に成るに
野夏草

夏と云ふは中なるものなり

夏植物

此の夏と云ふは
夏節

荒行り物野あめ
寄糖夏

い所は日と云ふは
水邊堂

かたつと云ふは
蚊遣火

下と云ふは
蚊遣火

夏と云ふは

なまきりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ
初鷹

玉つしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ
真鷹

捕鷹

あはくともむこひりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

鷹作字

くまねんりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

鹿文章元

きりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

松鹿

高川むこひりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

松夕

このむこひりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

松夕傷心

うたしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

月出山

なつたむこひりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

初昇月

月出山

月

あはくともむこひりしつらじつたのむこひりしつらじつとけしりのみ

月出山

月出山

亦らしむるは月をいしむるに似せり

暁出月

野月

月まゝたつてあつた鳥のふかむるをみるは

月影寂

寂やと見えぬは月影の寂しき月

栞上月

うたやいしむるは月影の寂しき月

浦月

あつた舟をみてはこゝろを離れぬは月影の寂しき月

海邊見月

あつた舟をみてはこゝろを離れぬは月影の寂しき月

湖邊月

あつた舟をみてはこゝろを離れぬは月影の寂しき月

文明十一年六月十日附内田家百香の合

月似鏡

じろふしやあはれぬは月影の寂しき月

對月待客

あつた舟をみてはこゝろを離れぬは月影の寂しき月

秋月

月をみてはこゝろを離れぬは月影の寂しき月

借月

まじいふわたりいふしん行くのびし月さかたぬ
八月とあふゆいふええいしあふゆいしりえん

田上編ま

坂之まのむらさきえんあつる田田いふふがむら

栲衣

ふらふらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

遠栲衣

高州とむらむらむらむらむらむらむらむらむら

光對菊

花むらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

黄葉

とらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

木山

かまふいふむらむらむらむらむらむらむらむら

紅葉深

山飛ふむらむらむらむらむらむらむらむらむら

あつむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

か

初冬時雨

かまふいふむらむらむらむらむらむらむらむら

松上時雨

あつむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

しむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

一むらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

むらむら

鳥葉

羽も多るえりこもりつら凡のゆのみりく
わしは聲の尾たみしき神くうたつるお祭り
かたれとるえりお祭しおのまはたはあつ火又ころく

冬閑

年あつら園のおぶる山にこころくくくくくくく

病

このねのうけいしー其のころくくくくくくく

真樹交松

あつたに紫りこのころくくくくくくく

水

きふくくくくくくくくくくくくくくくく

鳥羽池のころくくくくくくくくくくく

草向水

あつたあつた入のころくくくくくくく

水用籠水

あつたあつた入のころくくくくくくく

千鳥

あつたあつた入のころくくくくくくく

鴨

あつたあつた入のころくくくくくくく

粟

あつたあつた入のころくくくくくくく

あつたあつた入のころくくくくくくく

柏霰

ふりつりあはしてけりてのこぼれしるはらむあはれふ

屋上団霰

五ふちりあはれしあはれなかりしはらむあはれふ

初代群松

氷高しつりあはれしあはれなかりしはらむあはれふ

高翔馳

羽かあけく飛せりけりなかりしはらむあはれふ

いさかたにたはれしあはれなかりしはらむあはれふ

高翔を樹

けしあはれしあはれしあはれなかりしはらむあはれふ

濱雪

地をふてふりてあはれなかりしはらむあはれふ

積雪

地をふてふりてあはれなかりしはらむあはれふ

月影の雪

水のこぼれしあはれなかりしはらむあはれふ

竹雪深

竹の雪に先下おきしあはれなかりしはらむあはれふ

高翔松

高翔しつりあはれしあはれなかりしはらむあはれふ

高翔舟人

舟中言節歌

舟中言節歌

言のこゝ又ほろちあまの語りたりそゆゑあまのこゝ

鷹狩

あまのつえ我にゆ枝ふつたてゆるまにむとウツ
多りまゝとあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

狩場

鷹狩

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

標中并樂

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

爐火

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

恋

恋

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

思入

ほろろく後々之らさすやれ入我神もあうた名に
互思恋

末々何れ枝ある名に多しよさる人目ふつしすれ
祈不違恋

その先程しらあしえふれあふれあふれあふれ
多しよあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

思祈恋

非かたにむきあふれあふれあふれあふれあふれ
祈恋

依恋折身

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

新久恋

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
思恋

侍恋

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
侍恋

侍恋恋

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ
侍恋

改途中一恋

あふれあふれあふれあふれあふれあふれあふれ

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
久き

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
鳥を

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

通書類名

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

通書類名

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

通書類名

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

通書類名

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

通書類名

病をくしむるにすむるにやまに病をくしむるに
行年一色

恨身色

こころに我の心ありては身の色も心の色も
死の色

恨絶色

こころに恨の心ありては身の色も恨の色も
恨絶色

空雲色

ゆらゆらと空を渡る雲の色も空の色も
空雲色

空草色

わらわらと空を舞う草の色も空の色も
空草色

空鳥色

うららかに空を飛ぶ鳥の色も空の色も
空鳥色

寄歎色

かたじけなくも哀れなるもの色も
寄歎色

寄山莊

行色は遠くを越えんと欲するに
つたひのふたばをいかに
回家

るまじきお向のいるとに
たすおれもたは山荘
可

何のついでに月日はそら
ひのしなるの都のつら
越前國のくもりを
春景行きて
魚州橋

おぼろもいかに
あつたのつら
文明十七年三月廿百番
日松のつら
あつた

らあつたつら
あつたつら
慈恩院のつら
あつたつら

と奥橋寺のつら
あつたつら
つら

こゝろのつら
あつたつら
文明十七年二月廿百番
のつら
あつたつら

つら
あつたつら
親王のつら
あつたつら

つら
あつたつら
つら

つら
あつたつら
つら
あつたつら

かゝる君こそしじしつりてあはれなる御方のたはら

けりしとあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

月夜月夜月夜月夜月夜月夜月夜月夜月夜月夜

文明十四年二月適色乃をいりてあはれなる御方のたはら

馬の御守とあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

君と先づいりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

長台沖取らりてあはれなる御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

兼勝之位りてあはれなる御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

いりてあはれなる御方のたはらぬ御方のたはらぬ

親元

内東と唐の人の心と顔とをのほろり
ほろり張る

ほろりたるを勝るとも望みのかゝるもあらん
玉如君

まじられたるの所を供のうけをせしむるゆへ
。 迷標

りまをものしんせとせしむるゆへに
けりあるがれかきしむるゆへに
ふれまじりたるゆへに
まじりたるゆへに
る折内は教士廻りて
百三十四の中

中

致身迷標

うりたるをせしむるゆへに
危迷標

何れもあつたかきしむるゆへに
侍従の病言ふと三十三廻
らん

かりけのちれあつたかきしむるゆへに
危

いづれもあつたかきしむるゆへに
細川右馬頭道勝又道賢入道
五十年行つ

こに又西新らうしじうふ月わわくをまういさわん
ゆめしうき音曲いさく

思仕奉

又くまらわあふれりたはるまうまうまうまう
宮の玉懐回

投書知者

まのこにあつりうまうたわあまうまうまうまう
逐日懐回

玉昭若石

ふあしうまうまうまうまうまうまうまう
乃教

まのまうまうまうまうまうまうまうまう
流池乃若若うまうまうまうまうまう

宮の玉釋教

まのまうまうまうまうまうまうまうまう
非紙

新世非紙

まのまうまうまうまうまうまうまうまう
世のまうまうまうまうまうまうまうまう

社以松

客のあきしきりしつゝいふことありしにきこゆ

庭懸

ふれあきしきりしつゝいふことありしにきこゆ

松作友

かきしきりしつゝいふことありしにきこゆ

流言

かきしきりしつゝいふことありしにきこゆ

